



第15回日本認知症予防学会学術集会 ランチョンセミナー5

日時

2026年9月12日（土）
12：20～13：10

会場

第4会場

（Gメッセ群馬 2F 中会議室202）

〒370-0044 群馬県高崎市岩押町12番24号

始められない認知症医療を変える ～地域医療に求められる新たな視点～

座長

長田 乾 先生

横浜総合病院臨床研究センター長
横浜市認知症疾患医療センター長

演者

内門 大丈 先生

医療法人社団彰耀会 メモリーケアクリニック湘南
理事長・院長

ご参加には、学術集会のオンライン参加登録が必要となります。
詳細は、学術集会ホームページをご確認ください。

<https://square.umin.ac.jp/jsdp2026/index.html>

※本セミナーは、現地開催のみとなります。

※整理券配布はございませんので会場へ直接お越しください。



始められない認知症医療を変える ～地域医療に求められる新たな視点～

内門 大丈 先生

医療法人社団彰耀会 メモリーケアクリニック湘南 理事長・院長

認知症医療では、診断後に治療の必要性が認識されても、服薬アドヒアランスへの不安から薬物療法の開始をためらう場面が少なくない。認知機能低下に伴う服薬忘れ、重複服薬、誤用は安全性に直結し、家族や支援者の負担増大にもつながる。とくに独居、高齢夫婦世帯、介護サービス未導入例では、診察室での説明だけでは継続服薬の見通しを立てにくく、「治療したくても始められない」状況が生じやすい。こうした治療導入の停滞は、症状進行への対応の遅れや生活機能、QOLの低下を招き得るため、地域全体で支える視点が求められる。

神奈川県平塚市では、連携型認知症疾患医療センターを核に、初期導入施設、精神科病院、かかりつけ医、行政、地域包括支援センター等が協働する

「HIRATSUKAモデル」を構築してきた。本モデルでは、1次予防から3次予防までを視野に、疾患啓発や相談支援、早期受診、診断、治療導入、生活支援、継続的フォローを切れ目なく結び、患者の生活背景に即した支援体制を整えることを重視している。服薬管理に不安がある場合には、訪問看護師等による服薬確認や見守りを導入し、生活リズムや支援頻度に応じた製剤選択を行うことで、安全性と継続性の両立を図る。これらの情報共有は、医療者の処方判断を支え、治療開始への心理的障壁を下げる役割も担う。

本講演では、服薬管理上の課題により治療開始が困難と考えられた認知症患者に対し、多職種によるアウトリーチ支援と、週2回投与を特徴とするリバルエンLAパッチの導入を組み合わせ、服薬支援体制の構築と治療継続につながった症例を提示する。服薬アドヒアランス不安を患者・家族のみの課題とせず、地域資源を活用して支える仕組みとして捉え直すことで、「始められない認知症医療」をいかに変え得るかを考察する。多職種連携と適切な製剤選択を融合した地域実践を通じ、今後の認知症医療に求められる連携のあり方と課題を展望する。